京交山岳部報

No. 372　　'83　10月号

〔第1453回例会〕　宮後前部長追悼登山

徳本峠より上高地　(R)

日　時　10月9日(日)～10日(祭)　8日　19時　壬生本局前

コース　京都ー松本ー島々…徳本峠(泊)…明神…上高地ー島々ー松本ー京都

担当者　高速　岡田茂久(TEL 3282)　地図1/2.5万「波田、上高地」

備　考　前月号の予告どおり、マイクロバス(定員25名)にて計画どおり実施します。

〔第1454回例会〕　鈴鹿の山

釈迦ケ岳　(T)

日　時　10月16日(日)　烏丸五条北東角　AM7:00

コース　京都ー八日市ー永源寺ー西行原(車止)ーセンコウ谷ー中峠ー釈迦ケ岳ーハト峰ーヒロ沢ー神崎川ー西行原(車止)ー八日市ー京都IC

担当者　梅津　吉田　武(TEL 2539)

備　考　マイカーで行きますので、事前に連絡して下さい。

〔第1455回例会〕　揖斐、坂内の山をいく

シリーズ　第二回　黒津山　(T)

日　時　10月22日(土)～23日(日)　午後4時出発

コース　京都ー関ケ原ー赤坂ー揖斐ー横山ダムー坂本ー黒津谷(泊)…1197m黒津山　地形図「美濃広瀬」　2万5千分の1

担当者　OB　伊藤潤治(TEL 463-4936)

備　考　マイカーで行きますので、事前に連絡して下さい。

今月の集会

(机上講習)　幕営技術について　(岡田　担当)

10月13日(木)

〔第１４５６回例会〕

金 毘 羅 山　　（T）

日　　時　　10月23日（日）及び30日（日）　8時30分 江文神社　絵馬堂前集合

担 当 者　　高速　　岡田茂久（TEL　3282）

備　　考　　10月23日　遭難者救助訓練
　　10月30日　登はん競技会　　岳連行事を見学します。

企画運営リーダー会

10月17日（月）　田中 宅

雷　"クワバラ"　"クワバラ"

岡　田　茂　久

実は私は子供のころ雷が大好きだった。目もくらむような電光と脳天をどやされるような雷鳴を聞くと、なんともいえぬ快感が体を突き抜け次の雷をわくわくしながら待っていたものである。ところが登山を始め、又今の業務になってから"雷コワーイ"にとり付かれてしまった。夏山の稜線でピッケルがビーッとうなる恐怖、逃れる陰とてない原野での落雷、落雷で変電所が停電し系統盤の表示灯全部が点滅し地下鉄が３０分も止ってしまう恐怖。ほんとに"雷コワーイ"である。

古来、人々は雷を"雷神"として又神の怒りとして"神鳴り"ともいい恐れてきた。現代でも雷の怖い人は多いが、古代においては人智の及ばない現象としてもっと恐れおののいたことであろう。なにとぞ雷の落ちませんようにと人々は雷神として祀ってきたのである。近郊では西国３３ヶ所の札所、岩間寺、北野の天神さんが有名で、北野の天神さんは菅原道真公が鎮められる天暦元年以前より"北野雷公"として火難除け、五穀豊穣、雷除けの神様として人々の崇敬を受けていたという。朝廷においても雨ごひと豊年を祈願するのが慣しであったと記録されている。今日ではもっぱら雷除けの神様として、毎年６月１日には"火元御子社例祭"又"雷除け大祭"として電力関係者等でにぎわい毎月２５日の"天神さん"とは又異る雰囲気で賑っている。かくいう私共の地下鉄変電所にも岩間山と天神さんのお札が仲よく並んで祀ってある。

ところで雷が鳴るとカヤを吊り線香を焚いて"クワバラ"、"クワバラ"と唱えればよいと巷間に伝えている。語源伝承はもう一つ不明だが、一説に菅原道真公が怨死して雷神として崇ったときも、菅公の領地である"桑原"には落雷がなかったことからでたとも、雷は桑の木がことの他嫌いであるからともいわれている。

雷とはなんであろうか。約220年前フランクリンが雷雨の中でタコを上げて雷が電気現象であることを証明したことはみんなが知っている。しかしそのメカニズムは正確にはまだ解明されていな

京都岳連ニュース

第４号（昭和58年９月20日発行）
発行所　京都府山岳連盟
京都市伏見区深草中ノ島町39
ミユキ商事気付
電話(075)641－9291
編集責任者　津田弘毅
発行人　清水朝一
印刷所　大勝堂 231－2762

第２回岩登り競技会案内

下記の要領で行います。奮って御参加下さい。

○期　日　**58年10月30日（日）小雨決行**
○会　場　京都市左京区大原　金毘羅山
ホワイトチムニー（ルート：チムニー左の通称スラブルート）
○競技種別　成年男子・成年女子の２種別
○出場資格　京都府山岳連盟の加盟団体員ならびに京都府下に居住または勤務する満18才以上の男女。ただし高校生は除く。
○競技方法　競技は個人単位とし，登はん及び懸垂下降の技術と速さを競う。
担荷重量は５キログラムとする。
○競技内容　登はんは，トップロープを使用する。登はん終了点より下降開始点までの移動はフイクスドロープにカラビナを用いて自己確保する。懸垂下降はプルージックをとり肩がらみまたは下降器具を用いて行う。回収したザイルを持ってゴール地点に達した時を競技終了とする。（ザイルは巻かなくて良い）
○採点内容　時間70点・技術30点のトータルにより順位を決定する。
○競技規定　㈳日本山岳協会の国民体育大会山岳競技規則に準拠して，国体山岳競技京都府予選会方式により行う。
○表　彰　種別(男女)ごとに，第3位まで賞状・賞品を授与し表彰する。
参加者全員に参加賞（バッチ）を交付する。
○参加料　加盟団体員 500円　その他 1,000円
○出場申込　**10月15日**までに所定の用紙に必要事項を記入し下記あてに申し込むこと。
先着50名で締切ります。
〒612 京都市伏見区深草中ノ島町39
㈱ミユキ商事気付
京都府山岳連盟事務所
○集　合　当日，午前８時30分までに，江文神社絵馬堂前に集合。
競技に入る前に，要領・採点方法について説明を行うので必ず定刻までに集合のこと。
○携行装備　次の装備を必ず持参すること。
ザイル（11ミリ 40m）・ヘルメット・登はん用安全ベルト・手袋・ザック・カラビナ（安全ベルト用以外に３枚以上）
シュリンゲ（プルージック用３本以上。６ミリ以上のダブル又は８ミリ以上のシングル）
○安全対策　競技の安全に万全を期し出場者全員に保険をかけるが，万一の事故について応急措置は講ずるが責任は負わない。

近畿地区国体予選会開かれる

去る８月６日～７日奈良県曽爾山系において，第38回国体近畿地区の予選会が開かれた。来年39回国体を迎える奈良県の意気込みはすごく，少年男女及び成年女子全てが入賞し，本番出場権を獲

得した。京都は健闘むなしく少年男子が3位に入賞したものの，全て選外となった。

入賞成績は次の通り

成年女子

① 奈良　② 大阪　③ 滋賀

※ 奈良はあかぎ国体へ

少年男子

① 奈良　② 滋賀　③ 京都

※ 奈良・滋賀はあかぎ国体へ

少年女子

① 滋賀　② 奈良　③ 兵庫

※ 滋賀・奈良はあかぎ国体へ

なお，近畿地区予選のない成年男子は以下の陣容で，10月15日～20日群馬県武尊（ほたか）尾瀬山系で開催される，「あかぎ国体」に臨む。

成年男子　監督　小山敏夫（山友ク）

選手　友田幸一・安藤良樹・落合孝義

（以上山友ク）

選手は，目下大会を目指してトレーニングにはげんでおり，既に現地トレーニングの成果も見られ，国体での入賞が期待されている。

63年京都国体にむけて特別委員会を設置！

5年後に京都で開かれる国体に向って，府体協傘下の各団体もそれぞれ準備に入りつつあるが，わが岳連も特別委員会（栗飯原一成委員長以下12名）を設置，種々問題を検討しつつ，今後の対応を図っていくこととなった。

日山協 山岳遭難共済に加入しよう

事故は起さぬことが，我々山を愛し山に行くものの合い言葉ですが，万全に対処しても万一ということはあります。いや万一の場合も含めて対処するのが，本当の意味で万全の処置だと思います。日本山岳協会の山岳遭難共済は年間の保険料7,320円で死亡・後遺障害150万，捜索費100万が支払われます。加入者の増加は保険料の値下げにもつながります。ぜひ加入して下さい。

申し込みや詳しいことは岳連へお問合せ下さい。（本紙発行所で可）

昭和58年度公認指導員検定会（岩登り技術）のご案内

（検定委員会）

昭和58年度公認指導員検定会（岩登り技術）を下記のとおり実施しますので，各会の有資格者は一人でも多く受検されるようご案内申し上げます。

実施期日　58年11月19日～20日（小雨決行）

実施場所　洛北（大原）金毘羅山の岩場，静原キャンプ場

集合地　静原キャンプ場

19日18:30より随時検定を行いますから20:00までに必ず集合下さい。

受検料　1,500円（保険料を含む）

検定の種類　◆日本山岳協会第二種指導員

◆京都府山岳連盟地区指導員

受検資格　◆日本山岳協会第二種指導員を受検する人は，京都府山岳連盟地区指導員である事。

◆京都府山岳連盟地区指導員を受検する人は，加盟団体の会員であって58年11月20日現在23才以上であり，前年度に京都岳連が主催または主管する事業に参加しており，次の山歴を有する者。

・山歴5年以上（うち冬山3年以上）であること。

検定内容　日本山岳協会指導員検定基準（岩登り技術）による。

（ザイルの結び方，隔時登攀，制動確保，懸垂下降等の指導法及び実技について）

注：上記検定合格者は積雪期に実施される「氷雪技術」の検定及び学科試験の合格により認定される。（各科目の有効期間は2年）

検定員　日山協公認主任検定員及び日山協第一種指導員，第二種指導員

装備　上記検定会に必要な装備，食糧3食分，筆記具

受検申込　11月13日までに右記申込書に受検料をそえて申込んで下さい。

申込先　京都市伏見区深草中ノ島町39

ミユキ商事気付 京都府山岳連事務所

又は，各講習会場でも受付けます。

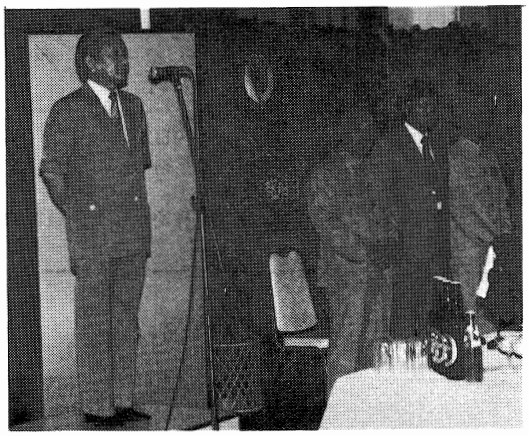
◎受検者のための講習会　　3ページ参照

●検定順序　11月19日　18:30から21時迄ザイルの結び方の検定。21:00～22:00学科テスト。20日早朝より金毘羅山の岩場で実技検定。

●「氷雪技術」の検定及び学科については次のニュースで詳しくお知らせしますが，59年3月3日・4日伊吹で実施の予定です。それに伴うインドアー講習も58年12月6日，59年1月19日・2月21日。実技講習は59年1月28日・29日 比良で行う予定です。

中国登山協会代表団入洛

8月8日中国登山協会より史占春団長以下8名が入洛，新京都ホテルにて勧迎レセプションが岳連主催により開かれた。京都側としては，小谷会長を始め多数が参加，特に中国登山においてお世話になった京都カラコルムクラブ（コングール峰），京大岳士山岳会（カンペンチン峰），同志社大学山岳部（スークーニャン峰），京都山岳会（ポコダ峰）のメンバーの方々は顔なじみでもあり旧交を暖めた。



公認指導員養成講習会のお知らせ

今日，京都岳連では技術・指導力にすぐれた多数の指導員・審判員の養成が急務であり，加盟団体より巾広く人材を求め，将来岳連を担う指導員・審判員の養成に勤めなければなりません。

目的達成の為，現在の検定水準を維持する上においても，次の養成事業を実施致しますので，指導員資格の取得を積極的に各会1名以上応募下さるようにお願い致します。

地区指導員の方に，いまさら！と云わずに是非第2種検定に向って，多くの方が参加される事を強く要望致します。皆さんは日常活躍されておられるので，直接検定に臨んで頂いて充分合格圏内にあります。何卒この主旨をご理解の上，自己の為，山岳会又は後輩の為，あと一歩の前進を期待します。現在40名程の受講者があります。

受講資格(1)　京都府山岳連盟の加盟団体員であること。
現に地区指導員で第2種指導員を受検しようとする者。

(注)　この講習会は検定会の受検資格とは関係ありませんが，検定合格をより確実にするためには，是非とも受講されるようお奨めします。

受講資格(2)　58年度指導員全員集会で下記の通り改正された。

地区指導員
- **年令　23才以上（検定日現在）**
- **経験　山歴5年以上（うち冬山3年以上）**

日山協第2種を受検された方、従来通り（地区指導員である事）

本年度から受検者全員に日山協発行の登山指導教程１を購入して頂き，できるだけ統一された正しい指導法・正しい知識と技術で適切な指導が出来るようにしたいと考えております。

回数	実施日	集合時間	場所	内容講師
第５回 室内	11/10 (木)	19時	岡崎 伝統産 業会館	ザイルの結び方 一般常識と検定内容 ㈱中野　林　西川 中浜　中村
第６回 実地	11/13 (日)	9時	金毘羅 絵馬堂	基礎術全般と応用 検定内容について ㈱栗飯原　木田 木崎　田中　西川 中村
検定日	11/19 ～２０	20時	前ページ案内	19日21時～22時 学科テストを行います。 検定委員　全員参加

岳連旗新調

新しいデザインによる岳連旗の新調を考え，アイデア募集を行いましたがいまひとつ，よい図案のものがなく，結局従来どうりのデザインで新調されました。

今後の岳連主催の各種大会には，この旗の下で友好を深め，力を競いましょう。

山の仲間の合い言葉

ゴミは必ず持ち帰ろう！

自然保護につとめよう

昭和５８年度

無雪期遭難者救助訓練
及び救助隊員全員集会のご案内

京岳連救助隊員を中心にした救助訓練は，今後その任期（２年間）を１サイクルとして実施します。今年度は更新年に当りますので救助に関する基礎技術の演習を行い，次年度は応用面を含めた総合訓練を予定しています。

特に今年度は新規購入装備を使用しての訓練を計画していますので，多数参加していただくようお願い致します。

1. 救　助　訓　練

(1)日　　時　昭和58年10月23日(日)　８時より
(2)場　　所　金毘羅の岩場
(3)対 象 者　京岳連救助隊員及び各会のCL，SL
(4)訓練内容
　ア.救助テキスト（都岳連編集の岩場編）の技術演習
　イ.レスキューハーネス（新装備）使用方法の演習
　ウ.レスキューシート（新装備）使用方法の演習
　エ.応急処置の演習
(5)装　　備　登攀用具一式，昼食

2. 救助隊員全員集会

(1)日　　時　昭和58年10月22日(土)　20時より
(2)場　　所　静原キャンプセンター
(3)対 象 者　京岳連救助隊員及び翌日の救助訓練参加者
(4)内　　容　ア.救助訓練内容のミーティング
　イ.救助テキストの技術研修
　ウ.懇 親 会

3. 申し込み，その他

(1)参加費用　1,000円（保険代，資料代他）
(2)申し込み（別紙）　10月７日までに参加費用を添えて岳連事務所へ
　〒612　京都市伏見区深草中ノ島町39
　ミユキ商事気付
　TEL 641－9291
(3)問い合せ　遇対委員長　西山和明まで
　TEL 571－6784
(4)救助訓練参加者はできるだけ前夜の全員集会より参加下さい。
(5)食べ物・飲み物は若干ながら準備していますが訓練当日の朝食及び昼食は各自にて用意願います。

い。一般的には雷は水蒸気（雲）が作る自然の電気とされており、上昇した過冷却（0°Cになっても凍結しない）の水滴がもっと上空の－20°C以上の帯域に入って氷の結晶になった時帯電するとも、水蒸気や氷、その他の微粉が摩擦することによって帯電するともいう。

雷の種類を大別すると、一つは〝熱雷〟雷の中で一番多く夏の暑い日に地面が熱せられて上昇気流が起り、積乱雲を生じその中に発生するもので活動時間も長いものである。又大平洋から日本上空に暖い湿った空気がある時、大陸から冷い乾いた空気が暖い空気の下にどっと流れ込み寒冷前線を形造り、猛烈な上昇気流となって発雷するものを〝界雷〟という。そしてこの熱雷と界雷が同時に発生するものを〝熱界雷〟といい、その活動は最も激しく数時間も継続する。今年我々が尾瀬で遭遇したのはこれであろう。ひん度は少ないが〝渦雷〟というものもある。発達した台風や低気圧の中心附近での上昇気流によって発生するものである。その他特殊なものとしては火山の爆発や大火事の時に空気が局部的に熱せられて上昇気流となり、又その噴煙や煙の微粉が摩擦されて起る天山雷や火事雷というものもある。

ＩＫＬ（年平均雷雨日数）という電力中央研究所が作成したデーターがある。これをみると年平均３０日以上雷が発生した地域は、近くでは岐阜県中部、滋賀県から三重県北部と奈良県北部にかけての地域が入っており、我々がよく行動する山岳地域も多く含まれており注意したい。
ちなみに一回の落雷で放電される電気の量は６０００ＫＷといわれている。これは夏の地下鉄の電車走行、駅の冷房照明すべて含んだ平均１時間分に及ぶ電力量で、家庭ではふつうの洗濯機で２５００戸が８時間も続けて洗濯できる量である。

いづれにしても落雷という災害に遭遇しない為には、天気予報に注意し暑い日に寒冷前線が近ずき急に涼しい風が吹きだしたり積乱雲が発達している時などは、安全地帯に逃げ込む方が無難である。金属片などを頭上にかざしているのは最も危険で、体の下部にある金属も同じ様なものである。又幕営中のテントやトタン屋根の小屋等は雷に対しては全く無防備で露天より危いともいわれる。

しかしこれも一概にいえず、雷が鳴ったらおへソをかくせ、という言い伝えがあるが、過去落雷事故の被害者のデーターでは半数以上が金属片を持っておらず、人体自体に落雷している。これは人体が導体であり特に血液やリンパ液は電気抵抗が少なく、それらが体の最も表面に近いのがおへソであるからという話があり、なるほど一理はあるものと思う。

大木や小屋の軒下も危険であり、できれば鉄筋の建物がブレハブの床のある小屋が最も安全である。附近になければなるべく低い所にしゃがみ込むしかない。統計によると雷の発生は正午から午後６時頃までに７０％が集中しており、危険地帯は午前中に越える計画も必要であろう。しかしこれも時間と金にせかれる我々にとってはどうも無理なようだ。

あとは岩田山か天神さんのお札をザックにしのばせ、〝クワバラ〟〝クワバラ〟と唱えながらの行動しかない。諸兄のご安全を祈る。

（８月１７日記）

第１４４３回例会

白　　山　　鳩ヶ湯へのロングコース

大　槻　貞　従

8／5（金）　晴　　ＰＭ６：30山科を三橋氏の車で出発した。名神、北陸高速共空いており、福井北インターを降りて、予約しておいた勝山市内の清洋軒にＰＭ９：40到着した。早速案内してもらい、室へザックを上げたら、津田氏のザックが車に積んでない。これはえらいこっちゃと家へ電話を掛けたら、三橋宅の玄関の前に置き忘れてあったと奥さんが心配しておられたが、もうどうしようもない。他所の植木に水やりしていて急いで出発したからやろ、ま、なんとかなるやろということで、皆んな予備を出し合い、どうにか一人前の装備が出来上った。原田嬢は、かえって荷物が軽るなってよかったと喜びしきり。初めは気落ちして、ボヤいている津田さんをどうなぐさめたらよいか分らず、まあまあ…。

8／6（土）　晴　　ＡＭ６時起床、朝食をすませ6時４０分出発。市の瀬まで５０分ぐらいで快調に来たが、いつもなら別当出合まで入れるのが、駐車場が満車で車を捨ててバスに乗り換えさせられた。村役場の係員らしき人が大勢出て人の整理に当っており、よほど混雑しているらしいことが分った。係員に聞くと、今年は２～３日前まで雨の日が続いて、梅雨明けが遅れたせいで、地元の白山もうでの人々が一時に集中したとのことであった。沢山の人々は、まるで千日参りみたいに上り１，000人、下り１，000人の様想を呈していた。

出発は砂防新道を汗をふきふき石段を登っていった。家族連れが多く、小さい子供の手をひいたおばさん。若者グループ、おとし寄りと種々雑多な登山客に混って、やっと甚ノ助ヒュッテにたどり着いた。冷たい水場には行列が出来ており、喉をうるおして小休止の後、南竜山荘めざした。黒ボコ岩方面との分れを右に取り、歩きやすい水平歩道をなおも進んだ。このあたりまで来るとお花畠がちらほら見え出した。エコーラインとの分岐に到着し、山荘が樹の間ごしに見え出した。１２時到着。山荘2084ｍの高さは、さすがに涼しい。広々した草原に赤・黄・白・青、色とりどりの花が我々を迎えてくれた。ザックを置き、まずはビールで乾杯、ビヤホールでは味わえない千金の喉ごし、頭のてっぺんまでジーンとしびれてしまった。ここは人が少なく、さっきまでの混雑が、うそのようだ。のんびりテーブルを囲んで昼食をとらせてもらい、冷たい水も頭からかぶったりしてふんだんに飲ませてもらった。今日の泊りは南竜山荘なのでひとまずザックは室へ置き、これからの御前峰往復は、カメラ・雨具だけの空身一つで雲上の散策気分で行くことにした。

今日の日程は余裕があるのでのんびり登ることにしており、めずらしい花が目につけば立ち止まったり、ハイマツの濃緑色と草原の浅緑色とが綾なして、麓までなだれるような長いスロープの美しさに見惚れたりしながら、ぶらぶらと展望コースを登っていった。村さんは北アルプス方面の展望を写真に収めたいと重たい目をして望遠レンズを持ってこられたにもかゝわらず、あいにく曇っ

ており残念がっておられた。展望台から右下の大倉尾根下にエメラルド色にかゞやく白水湖が、一きわ美しさを添えていた。高度が上るにつれて左前方に御前峰が顔を出して来た。標高2,200mあたりの広々した弥陀ケ原のハイマツと白山特有の極小灌木が緑のジュータンのようで、ふんわりとした天然のしとねを形造っていた。私は童心に戻って、ヤッホー、ヤッホーと叫んでいた。街では出せないので、こういう所で思いきり大声を出すと気持ちがいい。小灌木の中にクロユリも見られ、特に沢山咲いていたのは、すきとおるような青い岩ギキョウだ。踏んづけないように注意しながら歩いていかんならんぐらい沢山咲いていた。

皆んな楽しいことずくめで、大倉尾根との合流点あたりまで来ると、もう目の前に室堂の宿舎が3棟見えて来た。白山神社奥宮に旅の安全をお願いし、しばらく一服した後に体調のよくない原田嬢を残して御前峰まで一登りした。ここより天上界と書いた立札の青石まで来ると、頂上の三角点を示す木柱がそれと見分けることが出来るようになってきたが、あと一息というところがしんどくなったってきたが、なんとか到着。あいにくガスっていて展望はよくなかったが、ガスの切れ間に天上池や下界が見えて来ると、『わあゝ、きれいや』と歓声があがる。祠をバックに写真を撮り、池めぐりコースに廻り込んで、室堂到着。今日の泊り客が多いのは登りの時にも気がついていたが、見ると食堂から100mぐらい行列が出来ており、夕食の順番を待っているらしい。日が暮れてもまだ夕食にありつけない人もいるかも知れないと思いながら、これは我々の南竜山荘も今ごろは混んでいるかもと気があせり、下りを急いだ。夕焼け空がほんのりとあたたかみを増し、お花畠にはニッコウキスゲ(黄色)、ハクサンコザクラ(ピンク)、イブキトラノオ(白色)がびっしりと咲き誇っていた。歩きやすい道で、上りにとっても、下りにとっても楽に歩ける新しい道だなあと思っている内に、南竜山荘への合流点に達した。室堂の混雑が嘘のような程空いており、食堂もガラガラでゆっくりとビールやら缶詰も余分に楽しむことが出来た。室も7畳に我々5人だけで寝られることになった。室に戻ってから酒盛りのやりなおしをやり、村さん持参のロバート・ブラウンで乾杯。疲れた体にジーンとしみわたってくる快よさはなんとも言えない醍醐味。登山の楽しさは、急激な空腹感とそれを充足する快感が得られることのようだと私は思う。

8／7　午前3時30分起床、本登山行のメインエベント、大自然がふんだんに残り、お花畠にうめつくされたロングコース、別山南走の朝が始った。満天の星を仰ぎ、すずやかな涼気を胸一ぱい吸い込んで、ランプの列が三三・五五想い想いの方向へ動いていく。テント幕営地へ行くまでに右へ折れる分岐点があるので、標識を見落さないように右折し、一旦谷まで30m程下り、赤谷で水を補充して、敷石を敷しつめたように歩きやすい道を一歩一歩マイペースで高度をかせいでいった。日中太陽に照りつけられての登りは、さえぎる物が何もないので、名前のごとくさぞ、きつい油坂だろうと思うが、日の出前なので割りに楽に油坂の頭にたどりつけた。その頃東の空が白んできて、美しい雲海の彼方から御来光が顔を出した。先着の若いパーティや、地元の老夫婦もしみじみと美しい雲海が遠く御岳まで続いている東の空をハイ松の茂みに風をよけて寝そべりながら、眺めておられた。若いパーティは肩を寄せ合いながら、楽しそうにラーメンの白いゆげを上げてすすっているほゝえましさ。地元の老夫婦は一週間前にもここへ来ているとのこと。尽きせぬ魅力があ

るのだろう。10分程休んで出発した。高度が上がるにつれて、稜線の左側は深い谷へ落込んでおり、かなりの高度感がありアルプス的な大きさが感じられる。この辺りから目立って大きく、種類も豊富なお花畠の中の快適な稜線歩きとなる。コケむした自然のまゝなたたずまいが多く残っている別山は楽しい。とにかく歩きやすく荒れていないのが他の山との大きな違いだ。やっと御舎利山のピークに着いた。登りはこれで終り。これからは下り一方だと思うと、半分気が楽になった。ふり返って見る御前峰はすばらしい形をしており、室堂の建物と左へ流れるようなスロープが印象的だった。さっそくカメラに収めた。又、ここから市の瀬方面へ急降下に千振尾根が落ちこんでおり未知のルートへ踏査意欲がそゝられる。別れのピークは目と鼻の先に見えるが、混雑していそうなので、ここで朝食することにした。持ち重りする村さん持参の砲弾のようなメロンを料理して身軽るくなったところで、別山到着。ここから見る風景もちょっと変わっており、足の長い山並みのこれからたどる稜線の向こうに打波川が白く光って見える。その打波川沿いに赤い尾根がかすかに見える。地図と照合すれば、どうやら終点の鳩ケ湯らしい。それにしてもまだはるかかなたで、思わずため息が出た。地元の人に教えてもらうと、すぐ目の下に別山平があり、三ノ峰の避難小屋から左へ派生する二ノ峰、一ノ峰、銚子峰と気の遠くなるようなアップダウンが続いている。我々は、三ノ峰から右へ折れてその先はかくれて見えない方向へ下っていくことになる。津田氏いわく「昔来た時別山平はニッコウキスゲの群生地であったのに、今年は咲いてへんな、おかしいな。」原田嬢に前宣伝していた手前、気をもんでおられたが、案ずることはなく別山平を過ぎ、稜線より石川県側へやゝ下った所に群生していた。今年は夏の前半が寒かったせいか、花には春咲きもまじって一せいに開花した感じで、マツムシ草、トリカブト、ハクサンイチゲ、シナノキンバイ、コイワカガミ、アオノツガザクラ、チングルマ、ヨツバシオガマ、ミヤマダイコンソウ、ウサギギク、ダイモンジソウ、キンポウゲ、ハクサンフウロ、イワオウギ、カライトソウ、シモツケソウ、クルマユリ等々、今を盛りと咲き競っていた。三橋氏は一日早く帰られるので、別山で別れた。皆んな体調はよく、予定通り三ノ峰に着いた。小屋を岐阜県側にちょっと下ったところに万年雪渓が残っており、それから流れ出る冷たい水は千金の値ほどに感じた。天上の楽園とはまさにこのような所かとしばらく涼風吹き抜ける草むらに寝そべって、ただ時間の経つのも忘れていたが、下から沢山パーティが登ってくるので、どこから来たのか尋ねると、鳩ケ湯から今朝登ってきたとのこと。福井や石川の人々にまじって横浜から来たという職域山岳会らしい20人程のグループが重装備で登って来た。どうやら別山まで行って折り返し、一泊ぐらいで帰る人も多いようだ。地元の人は日帰りで別山折り返しするとのこと。そんな話しを聞きながら、いよいよ三ノ峰を後にした。直下の道は狭く急坂で黒土でつるつるすべり、笹や草をつかまないと下りられなかった。ここで雨に遭ったらとても歩けないだろうと思われる。皆んな黙々と先を急いだ。

高度が下って暑さが戻ってくると、涼しい稜線歩きとお別れで、また暑くるしい下界へ戻ってきたかと思うと、ちょっとガッカリする。樹林も寸づまりのシラビソからダケカンバ、ブナの林、檜へと移り変っていた。やっと六本檜にたどり着いた。標識も完備しており4～5本大檜がかたまって立っている。ここで昼食をとった。ここまで来たらもう少しという感じがするが、それでも、ま

だ、下小池まで3．7Km、下小池から鳩ケ湯まで8Km、計11．7Km残っている。さすが長いと感じられる。だいぶよたって来たが、誰も弱音をはかず、急なジグザグ道を下りた。このコースは林間コースで暑さはさえぎられていたが、永く感じられる。振りあおぐと三ノ峰がせり上り急峻な高峰である。よくまあ、あんな高い所から降りて来たものだと感心する。やっと樹の間ごしに林道と打波川のさざめきが近くなってきた。やがて上小池の標識に着いた。もう刈込池へ迂回する元気もないので、下小池を目指した。歩けど歩けど着かず、誰もしゃべる元気もなくなったが、ひょっこり下小池の駐車場へ出た。ここでもよい水場があったので、頭からザンブとかぶり小憩の後、うだるような林道をあと2時間と自らを励ましながら歩き出した。1時間程歩いた頃飯場の車が乗せてくれ、15：50鳩ケ湯到着。やっとロングコースは終った。感じのよい大きな3階の大客間に案内してもらった。正面に三ノ峰が見える一等室だった。早速温泉で足腰をもみほぐし、ビールを飲んで一と眠り。考えてみると、朝4時から夕方4時まで12時間、よく歩いたものだと思うが、天気にめぐまれて終始ながめは良く、涼風に吹かれ、お花畠にかこまれて、しかも他の山ほど荒されていない大自然が、そのまゝ残っているのがすばらしかった。ほんとに来てよかった。又、帰ってから聞いたのだが、三橋さんが下られた千振尾根は、千古のブナ林の連続で特異なものがあったと。
今度来る時は、逆コースで鳩ケ湯～三ノ峰～別山～千振尾根～市の瀬～帰京もいいだろうと思われる。

〔コースタイム〕

8／5　山科インター18:30－名神－北陸高速－福井北インター20:30－勝山22：00（泊）

8／6　勝山 7:15－市ノ瀬 8:00－別当出合 8:30…砂防新道…甚ノ助ヒュッテ 10:40～10:45…黒ボコ別れ 11:08…南竜山荘 11:35～13:15…室堂 15:05～15:15…御前峰 15:55～16:05…室堂 16:40～16:50…南竜山荘 17:45（泊）

8／7　山荘 4:10…油坂の頭 5:25～5:40…御会利山 6:50～7:45（朝食）…別山 8:00～8:15…別山平 8:42～8:51…三ノ峰 9:51～10:22…六本檜 12:04～12:44…上小池 13:50…下小池 14:11～14:30…鳩ケ湯 15:50（泊）

8／8　帰京

〔参加者〕　村　宗松、津田　実、三橋　勉、原田加津子、大槻貞従　　5名

いつ来ても美しい山

白山登頂の記

ANGU

8月6日、市の瀬の永井旅館前で車の通行を規制され、止むなく路線バスで別当の出合に向う。規制の理由を土地の人に尋ねると、別当出合の駐車場が一杯で入れないとのこと。そのときは、何故だろうなー位に思ってバスに乗ったが、別当出合でその理由が判明した。

出合小屋の前は大変な人出で、愛宕山の千日詣りのようで砂防新道は延々長蛇の列である。仕方なく荷物をまとめて列中の人となる。老生の記憶が呆けたのか、山が変ったのか、登山道が好く成って仕舞い、余り疲れないうちに甚ノ助ヒュッテに到着した。此処も様変りして昔日の面影はなく小さな流れの水をポリタンに受けて、小砂の沈むのを待って呑んだ水が水道の蛇口から迸るようになっていた。大勢の人が我れ先に一つの蛇口に群がり、付近は食事をする人、休憩をする人等で腰を降ろすことも出来ない有り様で、我々は呆然とする。かって信仰の山、しろやまと仰がれ恐れられた山も、「白山よ、お前もかー」

当初の予定どおり砂防新道を外れて南竜ケ馬場に向う。流石に此の道は一般の登山者は少く、行きかう人達も練達の人達が多い。南竜山荘で宿泊の申込をし、一缶350円也の缶ビールを賞味し、食事をする。荷物を小屋にデポして軽い装備でパノラマコースを山頂へと向う。途中の休憩地点で見た大白川ダムの青さが印象的であった。平瀬道との合流点で、平瀬から登って来られたパーティに逢った。かって老生も村先輩に連れられて此の道を歩いたことがある。

当時は缶ビールがアルミでなく鉄で、岳友の産入れでありがたく拝受したが、非常に重かったこと、カンクラ雪渓で雪中に埋めて冷しておいた缶ビールが少しの間に忽然と消失したこと、等、辛らかったが楽しい山行であったことを思い出す。

山頂も大勢の人だったが、無事に三角点2700.02mに到着。登頂の記念写真をとる。一緒に苦労して登ったのに体調をくずして室堂で待機した原田さん、残念だったろう。

南竜山荘では八畳に5人と云う山小屋では考えられない厚遇を受け、室堂の殺人的な詰め込みを察して、小屋の主人の厚意を謝しつつ夢路を微睡む。

8月7日、午前4時起床。4時に出発の予定だったが前夜小屋の厚意で白山に咲く高山植物のスライドを観賞し過ぎたのが、村先輩の起床の声に起こされ寝惚け眼で荷作りをして表にとび出る。別山に続く油坂には点々とライトが続く。途中で通過したキャンプ地での雷の如き鼾声を後に一路別山へ急ぐ。油汗を流して登る為、油坂と云う名の付いた急坂を御来迎を拝むために急ぐ。こう書くと恰好がよいが、実はミミズの歩みで先頭集団は2276m地点近くの嶺線上で早く来いと呼んでいるが及ばず途中で御来迎となる。左前の2033mの峰に遮られて雲海を見るのみ、然し嶺線上で見た雲海の彼方の御岳や乗鞍岳は見事であった。矢張り来て好かった。喘ぎ、喘ぎ登った苦しみも一瞬のうちに忘れられる。高山へは歩いて登るものだ。苦あって楽あり、山を愛するものにのみが受けられる自然からの贈物である。自然よ、永遠なれ。

別山手前2342m地点で朝ご飯にする。前方にチブリ尾根を通して別当出合の林道と駐車場が見え、その前方に市ノ瀬があった。左手にはこれから登る別山、三ノ峰、二ノ峰そして銚子ノ峰が呼んでいる。そうだ。あの向うが石徹白だ。幾年か前、白馬へ降りたことがあった。雷に追われて、あれは何日だったろう。途中で見た此の世のものと思えぬ高山植物の乱れ咲く桃源境は無事に我々を迎えて呉れるだろうか。

別山、山頂で帰路を急ぐ三橋さんと別れ、彼の無事帰宅を祈りつつ三ノ峰に続く小径を降り、別山平に着く。老生の儚い願望空しく桃源境は這松の世界と変っていた。そこに休んでいた若者に「

もっと先に花は咲いています」との声に力を得て三ノ峰へと急ぐ。別山平から2208mの峰を越えると左側斜面は見事な高山植物に蔽われていた。いつか当時高速本部長だった原氏に申上げたとおりの桃源境が現存していた。かっちゃんに約束したニッコウ・キスゲの大群落こそ見えなかったが、名も知れぬ可憐な花々が一面に咲き乱れているさまは、西行法師の歌に「願はくば、花の下にて吾れ死なん、その如月の満月のころ」と云う句があるが、若し許されるならば、この老骨もこの花々の下に埋没したいものだ。閑話休題。

見事なお花畑を後に三ノ峰に着く。別山で登山者に聞いた雪渓に降り、水を補給する。鳩ケ湯から登って来られた土地の人に聞くと、この水は通年枯れることなく登山者を潤しているそうだ。石徹白に降りる際、この水場は知らず二ノ峰付近迄行ったと思うが、山へ行くときは充分に研究しておくべきだ。土地の人に別れを告げ、鳩ケ湯への降路をとる。急峻な小径を膝が笑う程急降下して林道終点についた。それから長い長い林道を歩いて、途中で村人の車に拾って戴き、鳩ケ湯温泉に無事到着した。宿の二階から見た三ノ峰に夕暮れの雲が掛っていた。

嗚呼、吾れよくも歩いたものだ。との感慨に耽けっているうちに暗が付近を包んでいた。同行者の皆様、よくぞこの老骨を無事に連れて帰ってくださいました。ありがとう御座居ました。また、出発時、ザックを置き忘れるという大失敗をやり大変ご迷惑をお掛けしたことを、おわびします。

追　記

白山では、山の犠牲者は冬期室堂で吹雪の為か、ガスに捲かれてか定かでないが、犠牲者が出たと聞いていたが、鳩ケ湯コースで三つもの供養碑が立っていたのは以外であった。亡くなられた方方の霊よ、安かなれと祈る。

第1444回例会

伊吹山 夜間登山

8／13～8／14　　岡本　孝

ムシ暑い夜だ。涼夜を求めてか、京都駅の東海道線ホームには、夜間登山者とおぼしい人々が群をなしていた。中には、子供ばかりの団体もあり、また、周囲の人たちの装備がやはり軽装だったのに比して、我々の格好な、いかにも、ものものしかったであろう。今回の山行は、来たる夏山合宿に向けてのトレーニングを目的としているので、1人15Kg程度を担うこととなり、大げさな有様となったのである。

国鉄近江長岡駅を降りると、最終連絡バスが待ち受ける。登山客を予想してか、ちょうど全員が乗れる2台を待機させていた。なかなか商売が上手いと思った。登山口の神社で装備を備える。あまり風もないし暑いので、Tシャツとジョギパンで歩くことにした。

夜間登山は初めての経験だが、歩いているときの感覚が、どうもいつもとちがう。眠気も手伝って方向感覚や平衡感覚等がどうも鈍くなっている。また、視野がヘッドランプに照らされた所に限

られるので、距離感や速度感も昼間とは全く異なるようだ。私の場合、ピッチがどうも速くなりがちだったようだ。トップを歩いていたので、後から「速いぞ」と言われて遅くしたつもりでも、つい速くなってしまう。五合目に着いた時には、２０分程の差がついてしまった。

ここまで来ると、眼下の夜景がとてもすばらしい。また、歩くことに夢中で気が付かなかった夜空を見上げれば、無限に広がる星の世界に絶句せんばかりであった。ここの小屋には、なんと、かき氷まで売っていて、午前三時頃まで開けているらしいが、かなり繁盛しているようであった。気温が下がってきたので、長袖とニッカに着替えて歩き出す。ガスが出てきた。よく気を付けていないと道をまちがうか、谷間に足を踏みはずしそうな感じである。眠気が一層増してくる。気がつくと、いつのまにか一人で歩いていた。当初の目的では、今晩あたり美しいであろうペルセウス座流星群を観賞するはずであった。しかし、悪視界と眠気のため、すっかり忘れてしまっていた。（皆は、１０個程見たらしい。）歩き続けるうちに遊歩道らしき道となり、ぼうっと目の前に明るい所が見える。頂上に来てしまったのだ。いままでの疲れが一度にふきとんだ。

ここは、しかし何とにぎやかな所か。煌煌と灯りはともり、いろんな屋台が並んでいる。客も多勢いるし、これが山頂の光景かと目を疑わせた。３０分程して全員そろう。簡単に夜食をとった。京都から持ってきた、ぬるくてマズイ缶ビールを飲みほす。地べたにマットを敷き、シュラフにもぐりこむ。夜露はあるが、結構寝られるものである。皆は御来光を仰いだらしいが、６時頃まで眠りこけた。快晴の、さわやかな朝だ。ラーメンを食して早々に下山する。美しい草花に露玉がきらりと光る。五合目で１回休んだだけで、ノンストップで下りてしまった。

私にとって、久々の山行であったが、膝を冷やしてしまったのは、失敗だった。京都に着いてから膝の痛みに悩まされ、次週のトレーニングには参加できなくなったのである。

〔コースタイム〕

８／１３　京都 21:31（国鉄）ー近江長岡 22:56～23:03（バス）ー登山口 23:12…神社 23:25…１合目 23:48～23:57…２合目 0:17…３合目 0:36…５合目 1:17～1:40…８合目 2:34…山頂 3:00

８／１４　山頂 6:24…７合目 6:57…５合目 7:20～7:40…３合目 8:00…１合目 8:24…神社 8:44～9:00…登山口 9:15　9:18（バス）9:30 近江長岡 9:41 ー米原（ＪＮＲ）9:51～10:12ー京都 11:22

〔参加者〕　山元誠一、　井上一夫、　岡本　孝　　その他　３名

第１４４７回例会

夏山合宿（鹿島槍と五龍岳）騒動記

山元誠一

こゝ数年、毎年夏になると、どこからともでてくる合宿の話。「もう、あんなしんどい目をするのはいや。今年はいかへんぞ。」と思い、最初は気乗り薄な顔をしているのであるが、過去の楽しい想い出を持ち出され、甘い言葉にだまされて、ついついのめり込んでしまうのである。そして、今年も又…。我々合宿参加者（先発隊８名）を乗せた夜行バス「ルート白馬号」は、盛大な見送りの中を、定刻を少し過ぎて京都駅八条口を出発。車内は、ほぼ満員であるが、山へ行くのは我々だけのようだ。〔「ルート白馬号」を待つ間、何台もの夜行バスが発着したのであるが、そのほとんどが「テニスギャル」を乗せたバスであった。来年の合宿は、ぜひ軽井沢へ。〕途中３回程休憩をとり、信濃大町に到着。下車したのは、我々だけであった。バス料金とほとんど差異がないとの事だったので、タクシーで、爺ケ岳登山口に向う。２０分程で登山口に到着し、堰堤の所で朝食をとることにする。朝の清々しい空気を胸一杯吸い込み、晴れ上がった空の下で美しい山々の稜線を眺めながら軽い体操をして、標高差１，０００m余りの種池山荘を目指して、７時１０分いよいよ出発だ。初めから急な登りが続く。樹林帯の中を重荷を背負って一歩、そして一歩、あえぎながらゆっくり進む。時折樹林帯をはずれると真夏の太陽が照りつける。３０分歩いて５分休憩のパターンの繰り返しで、風の余りない厳しい登りを汗を吹きださせ、ただ黙々と歩く。出発して４時間余り、ガスに包まれた種池山荘に到着。種池は「小さい水たまり」といったもので、その水は、とても飲める様なものではなかったが、それでも顔を拭う事ができ、一服の涼感を味わう事ができた。昼食をとり、１時間余り休憩した後、爺ケ岳、そして今日の幕営地「冷池山荘」に向け行動開始。（小屋の人に聞けば、この１週間余り雨が続いていて、今日は久し振りに太陽が見えたとの事。）

ゆるいジグザグ道を、流れるガスに揺れる高山植物を愛でながらゆっくり進む。１時間余りで爺ケ岳山頂２，６６９．８mの標識のあるピークに到着。数人の人が、鹿島槍方面にカメラを向け、ガスが晴れるのをじっと待っている様子。そこの三角点は、普通の三角点とは少し異なり、等級の記載がなく片面には「本三角点」、裏面には「山」と刻字されているだけであった。その内に、井戸さんが「本当の三角点は、もう一つ北側のピークでは」と…　暫時休憩（それでも、一応、今回の山行での１回目の万才を三唱）の後、本当の三角点のあると思われるピークに「重〜い」足どりで向う。３０分程度で目指すピークに到着。やはり、そこが「三等三角点」の標石がある爺ケ岳山頂であった。朝、行動を開始して以来７時間余り、皆、かなり疲れているみたいである。そんな我々をなぐさめてくれるかの様に、多くのトウヤクリンドウが風に吹かれて揺れていた。改めて「爺ケ岳登頂万才」を三唱して、ガスの中を冷池山荘に向う。途中ガレ場の横のハイマツの中から二羽の雷鳥（二羽の関係は、誰も知るよしもない。）が我々の騒々しさに驚いて飛びだしてきた。

ガスの中を疲れた身体にムチ打って歩く事1時間余り、目の前に冷池山荘がその姿を現わす。幕営地は、もう少し上との事なので幕営料を支払い、水（1ℓ　100円）を購入し、15時30分幕営地に到着。テントを設営し、夕食を食べる頃にはガスも切れ、南側には、種池山荘、そして我々を悩ました爺ケ岳の稜線が、また北側に目をやれば、明日登頂する鹿島槍の双耳峰がその姿を現わす。下から重いのをガマンして持って上がった「吉田さんから頂いたスイカ」（五竜岳迄持っていけなくて済みません。）を夕焼けに顔を染めながら食べる。その美味しかった事、美味しかった事。明日の行動を考えて早々とテントにもぐり込む。（19：00）

27日午前4時、ガスの立ち込める中、夜が明けきらぬのにテントを飛び出し、朝食の準備をする。しかし朝食を食べ終る頃には、夜も明け、いつの間にかガスも切れており、目を西に向けると昨年登った剣岳、立山三山が目の前にその姿を現わし、遙か遠くには槍の穂先も。東に目を向けると美しい御来迎が、（雲海はいまいちであった。）昨日以上に天候は良さそうだ。テントを撤収、朝の体操をし、鹿島槍ケ岳、そして五竜岳に向け5時35分に出発。上空には青空が広がり、東には雲海が、そして早朝の太陽が我々と稜線の東斜面に咲くウサギギクや、チシマギキョウに照りつける。朝の清々しい空気が心地良く、布引山とそれに続く鹿島槍への登りの苦しさを忘れさせる。1時間余りで布引山に到着。360度の展望を楽しんだ後、今回の山行のハイライト鹿島槍ケ岳本峰に向って出発。ゆるいジグザグ道を、そして最後の急な登りをあえぎあえぎ登りきると、そこは鹿島槍ケ岳本峰2，889．7ｍ。朝の強い日差しと冷たい空気、どこ迄も果しなく連なる山々、やはり3，000ｍ級の山頂は違う。

北の下方には、ガスの中に見え隠れするキレット小屋が、そしてその向こうには、今日の最終到達点五竜岳の大きな山塊がその姿を見せる。南に目を向けると、中央アルプスが、西を見れば、剣槍、穂高の峰々が…。2回目の万才三唱。（周りで休息を楽しんでおられる方々には大変御迷惑をお掛けしております。しかし、我々のこの声で頂きの近い事を知り勇気づけられた人もおられたそうです。）休憩の後、大槻さんの言葉もあり、鹿島槍北峰に向う。そこ迄の道は比較的歩きやすい砂礫道であったのに対して、一転して岩尾根のガラガラ道となっており、各自気を引きしめて慎重に進む。30分程で北峰の取付点に到達。荷物をおろし、空荷で北峰を往復する。そして急ぎ足で取付点に戻り、その少し下がった所にある雪田にそれこそまっしぐら。雪を堀り起し、日焼けした顔、首すじ、腕にこすりつける。「あ～、気持ちいゝ。」それから堀り出した雪をカップに一杯つめてハチミツをたっぷりかけた「カキ氷」を皆で取り破りで食べる。途中一緒になった「とし江」さんにも、大サービス。（こんな楽しみがあるから夏山合宿は、やめられない。）お腹の具合を心配するぐらい食べて、いよいよ恐怖の「八峰キレット」へ向けて出発する。岩場の急な下りが続く。途中、遠見尾根から五竜岳を目指す後発隊との交信が始まり、好調なピッチで登っておられる様子が伝えられる。

八峰キレットは、要所要所にハシゴや鎖が取付けられていたので、そう手こずる事なく通過し、稜線の鞍部に建てられたキレット小屋に到着する。（10：20）

小屋の前で我々が昼食をとっていると、えさを求めてか雷鳥の親子が人を恐れずウロウロ、ウロ

ウロ。昼食後、ガスのかゝり始めたキレット小屋を後に、五竜岳に向けて出発する。道は険しく、やせた岩尾根の連続で岩にしがみつくようにして、登ったり降りたり。（私が書いた縦断面図では平端な道になっていたのに。）所々にハシゴと鎖もあり、気を抜く事もできない厳しいルートであった。キレット小屋を出発して3時間余り、G4、G5ピークを過ぎ、いよいよ五竜岳への最後の急な登りの手前で休息をとる。朝、冷池の幕営地を出発して10時間弱、さすがに疲労が激しい。唯一の救いは、午後の行動中、沢から吹きあげてくるガスに身を晒すことができ、体力の消耗が防げた事である。

そこから見上げる岩場は、厳しく疲労の極限にある我々の気力を喪失させるのに充分であった。この時程、今回の夏山合宿を企画・立案した人（合憎、参加していなかったその人は…）に感謝した事はなかった。思わず、その顔が目の前に浮かんだ程でした。（ウッ！）それでも歩かなければ幕営地へはたどりつけないと思い、身体にムチ打ち、ヨロヨロと登り始める。岩場の所々に咲く「イワツメグサ」がその可憐な姿で我々を勇気づけてくれる。登る時は1時間余りかかると思っていたのに20分余りで稜線にでる。山頂はもっと先だと皆で言っていると、標識には「五竜岳」との記載があった。でも、そこには三角点がなく、北側に続く尾根があったのでそちらへ進むと、その時ナント、初めて「ブロッケン」を見た。霧の中に映しだされた自分の姿。自然が作りだす映像に思わず子供の様にはしゃいでしまった。そしてそこには、やはり三角点があり、本日最後の万才三唱。（途中から一緒になった「とし江さん」もヤケ気味に万才！）休憩の後、幕営地である五竜山荘に向け、ガスの中岩場を慎重に慎重に下る。最後迄気の抜けないルートである。それでも30分程で五竜山荘の見える所に出る。（ガスでそれ迄は確認できなかった。）後発隊の人達が迎えにでてくれているのが見える。握手で迎えてもらえ、そして美味しいお茶をもらう。その時は本当に生き返った心地がした。16時35分幕営地に到着。

五竜山荘前の幕営地にテントを設営し、後発隊の人々も含めて宴会。夕闇の中、充実感と仲間との楽しい語らい、感無量である。夜、テントの外にでるとまばゆいばかりの星が空を埋めつくし、今にも「パラパラ」と落ちてきそうな気がした。これもまた夏山合宿ならではの事である。

28日　午前5時、CLの「アサ〜！」の声でテントを飛び出し、御来迎を見に小屋の横に行く。東の空は既に明けかけ、下には雲海が果しなく広がっていた。（北岳で見た時以来の素晴しい雲海であった。）遠くには、八ガ岳、そしてその横には、富士山が、そして中央アルプスの峰々が。待つ事30分余り、やがてゆっくり太陽が昇り出す。五竜岳にモルゲンロードの朝陽があたり、西の山には太陽の蜃気楼だろうか、円形の虹の様なものが見えた。素晴らしい朝の光景である。

後発隊の人々が五竜岳に向っている間、我々は朝食をとり、そしてテントを撤収する。待つ事2時間余り、後発隊が下山してきたので一緒に唐松岳に向うべく8時8分に五竜山荘前を出発。道は昨日と打って変わり、ルンルンランランコース。いつの間にか曇ってしまった空を見上げながら、ひんやりした朝の稜線を歩く。鞍部を、そして岩場を通り抜けると唐松山荘に到着。荷物は山荘前に置き、空荷で山頂に駆け上がる。8分余りで頂上に、白馬三山が北方にその姿を見せ、南には五竜岳そして剣岳等が見渡せる。今回山行で4回目の万才を総勢13名で三唱。写真などを撮った後

唐松山荘迄戻って昼食。昼食後、ガスが再びかゝってきた八方尾根から黒菱荘を目指して下山する。途中、雪田で「カキ氷」を充分味わった後、八方池を経て八方山へ。ガスも切れ、白馬の町が見下せる。今回の山行で最後の万才を全員で三唱し、黒菱平へ一目散。このあたりは、日帰りハイキングコースとなっており、多くの人々が行き交う。3時30分黒菱平に到着し、4時発の白馬駅行のバスに乗り込む。

予定では、松本でゆっくりして帰京の予定であったが、白馬にもいゝ温泉があるとの事なのでそこへ行く事にする。（岳の湯と言う所） 駅からタクシーで岳の湯に向い、風呂に入り、3日間の汗を流し、そして打ち上げの宴会。山での話がとどまる事なく出てくる、出てくる。

タクシーで再び白馬駅に戻り、夜行バスに乗り込み一路京都へ。こうして夏山合宿は無事に終った。3日間、厳しい登り降りの連続で本当に疲れたが、天候に恵まれ、美しい御来迎と高山植物が私達の旅情を慰めてくれ、そして何にもまして良かったのは、楽しい仲間との交歓、とても充実した夏山合宿となった。

〔コースタイム〕

25日　京都駅八条口 22:18 発（夜行バス）

26日　5:56 信濃大町駅 6:10（タクシー）— 6:30（朝食）爺ケ岳登山口 7:10 …30分で5分休憩… 11:20（昼食）12:15 種池山荘… 13:20 ～ 13:45 爺ケ岳山頂着（ニセモノ）… 14:10 ～ 14:20 △本峰（三角点）… 15:30 冷池テント場

27日　冷池テント場 5:35 … 6:41 ～ 6:55 布引山… 7:45 ～ 8:10 △鹿島槍ケ岳（本峰）… 8:45 ～ 9:05 北峰分岐… 10:20（昼食）～ 11:00 八峰キレット小屋……G4．G5（14:20）… 15:20 ～ 15:51 △五竜山頂… 16:35 五竜山荘

28日　五竜山荘 8:08 … 10:39 唐松山荘… 10:50 ～ 11:05 △唐松山頂… 11:10（昼食）～ 12:00 唐松山荘… 14:14 ～ 14:40 △八方山… 15:35 黒菱荘 16:00（バス）— 16:35 白馬駅 16:50（タクシー）— 17:00 岳の湯 19:00（タクシー）— 19:45 白馬バス乗り場 20:00（夜行バス）— 5:05 京都駅

〔合宿参加者〕（敬称略）

先発隊　CL　大倉、　装備　井上、出海

SL兼会計　岡本　孝　記録　山元

食糧　井戸、竹田　アドバイザー　大槻

後発隊　岡田、荒田、和田、三橋、方山

夏山合宿
（後立山連峰）に参加して

井戸澄夫

京交山岳部の夏山合宿に初めて参加しました。8月下旬の天候の悪れやすい時期に、予想に反して絶好の日和になったことは、幸運だった。小生の歩くペースが遅く、皆さんを少なからずイライラさせたことを非常に反省しています。今後は例会に数多く参加するだけでなく、特別トレーニングをしてスタミナの増大に努めたいと思うのですが、どうやら口先だけのことになりそうです。

鹿島槍、五竜の縦走は考えていた以上に充実感のある山行でした。稜線から見た剣・立山連峰の見事さ、遠くに見えた南アルプス、富士山の美しいシルエット、吹き上げる風と雲の心地よさ、荒々しい岩肌の冷たい感触、岩の間にけなげに咲く花々、そのまゝ何時間でも黙って座っていたい、ついでに昼寝もしたい、そのような気持ちにさせる風景です。

小生は山行中の食糧計画を担当しましたが、今回は各自、ＥＰＩガスを使って自分の食事をするということで、非常に簡素なものとなりましたが、自分では結構腹もふくれて、半分近く食糧が残ってしまいました。しかし、山元氏によれば全然足りなかったということで、各人の食欲の個人差には驚かされます。今回の食事の中で、うまいなあと思ったのは、志津屋のカレーと農協の赤飯です。これからも愛用したいと思います。それから山上でのスイカの味も格別でした。差入れしてくれた方と重たさに負けず山上まで担ぎ上げてくれた方に感謝する次第であります。

夏山合宿に思う

大倉寛治郎

今回の夏山合宿のテーマは、「若いリーダーの育成」と粗食で軽量化が図れる様立案計画を行う。参加者との数回の打ち合せで、各分担、ルート、装備、交通機関、食糧、トレーニング等について意見を出し合って取り組み、合宿にそなえていく。

交通機関については、当初レンタカー使用を考えていたが、運転する人、事故、その他考えてみると、観光会社が出しているアルペンルート号を利用した方が、事故の心配もなく（？）乗れば目的地まで運んでもらえ、全員が同じ条件で行動できるという利点があり、バス利用に決った。

装備は今回、全員がEPIガスコンロを使用し、各個人で食事をとるので、大がかりな共同装備が省け、テント、フライ、応急薬品、カメラ、ラジオ、非常用無線機２台等と各班別と個人に分担する。個人の持ち物も限られてくると思うが、中には整理すれば軽量につながる物もあると思われ、

次回の山行には、もう少し検討を－！

食糧計画は個人単位で食事を取る為、それに添ったものを初参加の井戸さんを中心に取り組んでもらった。人間スポーツ工学的に計算されたカロリーメニューで、全行程・7食分、一人当り約2.5Kgであった。計画は大変だったと思う。大いに満腹を味わった人、ゴウカすぎた人、足りなかった人、個人差はあれ、大変よかったと思う。行動食についても、個人と班に渡し、それぞれ消化出来たと思う。

山岳部の目標である〝山の知識を高め、一人一人の巾広い山行の中で、若いリーダーの育成を！〟も山行動の中で学び、成長してくれた事と思う。粗食、軽量化も多分達成できたと思う。

私自身の鍛練にとリーダーを引き受けたが、この合宿を通じてよい経験が出来た。最後に反省として、2・3箇条書にしてみたいと思う。

1. 合宿参加者全員が、役割を分担する予定になっていたが、今回、2名については、分担出来なかった。次回からは、人員の把握をしっかりし、無分担の出ないようにしたい。
2. 合宿前数回のトレーニングで、全員のピッチをつかむ様、心かけたい。
3. ふだんから各人がトレーニングを心がけ、その成果を合宿にむける様にしていく。
4. 合宿を通して、一人一人が何か「？」を得たと思うし、今後とも、その得た知識を高め、巾のある活動をしてほしい。

〔参加メンバー〕

(2)大倉(CL)、　(1)岡本　孝(SL、会計)　(1)山元誠一(記録)
(2)井戸澄夫(食糧)　(2)井上一夫(装備)　(1)出海洋三
(2)竹田　勉　(1)大槻雅弘(アドバイザー)

第1448回例会

質志鐘乳洞
(ケービング入門)調査について

鷲見敏一

今回、最大の目的である洞内概略図作成(断面図、平面図)のための洞内調査には参加者11名全員の協力により(ルート工作班、測量班、写真撮影班)当初の目的は、ほぼ達せられました。

現在、現地(瑞穂町役場)へ鐘乳洞に関する資料を送付していただくよう依頼しております。双方の資料を照合し、より正確な完成図にし、次号部報に掲載致します。

参加された皆さん、ご苦労さんでした。

9月4日(日)　AM8:30西京極体育館前集合

西京極体育館前－9号線－須知交差点－9号線－丹波自然公園－173号－下質志－徒歩15分…鐘乳洞入口

〔参加者〕　担当　鷲見敏一

岡田茂久、大槻雅弘、和田良一、古市昌造、広瀬光太郎、大木秀実、方山宗子、藤井義章、鷲見寿未子、大槻綾子

質志鐘乳洞ケービングに参加して

広　瀬　光太郎

9月4日、AM8：30質志鐘乳洞ケービングに向う一行11名が、西京極に集合した。出で立ちはそれぞれつなぎの服や半パン、トレーニングウエア、鞍は山靴、安全靴、ジョッキングシューズなどで、各個人バラエティーにとんだ姿である。

私は、今回のケービング入門参加について約1カ月間体調が悪く、夏山合宿も断念し、これなら涼しく疲労も少なく気持ちよく行けるだろうと参加した。

3台の車に分乗し、西京極を後に一路洞穴に向って出発した。朝食がまだなので、途中パンと牛乳を買おうと思っていたが、今回の参加メンバーなら余分に食べ物を持っているだろうと書だけを残し弁当を食べてしまった。質志に到着すると、それぞれ持参した服に着替え、ランタン、巻尺等を振り分け、リーダーの「今回の目的は洞穴の調査であり、目的地まで30分急な所を歩かなければならない」との説明を受けた。調査に関してその専門家である藤井氏の参加は頼もしいが、さて30分の登りについては不安があった。

登りはじめ足の後の筋肉が張り、30分一気に行けるかどうか心配だったが、どうも30分というのは気力を充実させるためのもの（？）で10分で入口に到着した。私は10分歩いただけで息が切れ、足が張り、汗でタオルはボトボトになった。入口からは冷い風が吹いていたので、まっ先に中に入った。入口にくらべ中は広々としており、当然ながら一点の光もなかった。全員ハーネスカラビナ、シュリング等装備を身につけ、通称第一ホールに荷を運び込んだ。（入口より、ザイルをフィックスする）　ここで入口からの調査をするものと、奥の調査をするものと分かれ行動を開始した。私は、入口からの調査写真を担当した。

外の暑さに比べ洞穴は3000m級の秋山の気温で、動けども汗は一向にかかず、首にまいていたタオルが冷たくなっていた。（温度13°C）先に進んでいくと鉄パイプの柵があり、懸垂確保をしながら降りていった。

先に入った隊がランタンを照していてくれたから外様は分ったが、それが無ければ到底無理である。午前中の調査が終了したので全員第一ホールに引き上げ、昼食をすることにした。私は、食器もなく鷲見さんからおわんを借用し、箸をもってうろうろするばかりである。親切なみなさま方から種々のものをご馳走にあずかり、ここに紙面を貸りてお礼を述べる次第です。

また、洞穴の中で炊いたラーメンは、周囲の寒さの中で最高だった。腹一杯になると眠くなるのが人間の習性で全員が外に出て休息をとったが、私は外は暑いので中でゴロゴロとしていた。

午後の調査は全員でさらに奥に進むこととなり、コウモリがふわふわ浮いている中を周囲に気をくばりながら、一歩一歩足を踏み出していった。

本道からいたる所に横穴が出ており、まるで迷路の如く入り込んでおり、1人では到底入ることは困難である。どこかの岩をどけるとからくりがあり、「八ツ墓村」の場面そっくりで、埋蔵金が出てくるのではないかと期待もするが、以前に入った人々の空缶が捨ててあっただけである。

本道のつき当り付近から横穴が続いており、そこから深さ約6m、直径1mぐらいの縦穴があり私を除けた全員が1人づつ降りていった。私は、若干他の人より太目で、穴にひっかかって動けなくなる不安もあり、今回は遠慮させてもらった。

このころには全員が粘土質の土で、手袋、服、ズボン、靴もドロドロで、時間も時間なので撤退の準備にとりかかった。

藤井氏に概略図はできたかと聞くと、横穴や空間が入り込んでおり、地下鉄みたいにいかへんとのことで頭がゴチャゴチャしているという返事があり、帰って整理をするとのことであった。(概略図については、機会があれば紹介したいと思っております。)

洞穴に出ると外はまだ暑く、私は帰り支度が早かったので、しばらく穴に入り休んでいた。帰り道、湧き水が山道にあり、ドロドロになった体を拭き、煙草を一服つけ、気持ちよくひさしぶりの例会参加を味わっていた。

お月見登山

大文字山

三橋　勉

毎年恒例のお月見登山、今年は仲秋の名月9月21日に近くの大文字山でやろうという事で、錦林車庫前に夕方7時集合した一行10名が、各自にランプと傘を持って、小雨の中を出発する。途中で買物をして霊鑑寺の横を通り山道に入ると真暗である。本当は月あかりで歩くつもりであったが本日の雨まじりの天候では仕方がない。むし暑くてなかなか頂上に到着しないと思いながら登っていくと「大の字」より上に登っていたので逆に降りるはめになった。滑りやすい下り道を注意しながら進むと、やがて展望が開けてきた。京の夜景が素晴らしく、まるで飛行機に乗っているような感じである。

8時ごろ「大の字」の真中にある屋根つきの祠の前で本日のセレモニーを開催する。本日の担当者が不在のため急きょ、リーダーにされた武田君、そして奥さん。岡田部長そしてジャッカンこと吉田君。お月見ダンゴが売切れのためおはぎを3人前たいらげた広瀬烈さん。女辺チャンと方山のネエチャン、そしてお月さんこと大槻君。久しぶりに参加して下さった奥村さん。そして私こと三橋と以上10名がワイワイガヤガヤと、中年パワーを発散させてきました。

下山途中の9時50分ごろ、雲の間から「チョットダケネ」とお月さんも顔を出してくれました。

釈迦嶺のよみと
クロカベの所在点について

伊　藤　潤　治

第1429回例会、釈迦嶺の登頂報告を、第370号部報（83年8月）で行った。これをご覧になられた大垣の藤井茂雄兄より八月十二日付で、釈迦嶺この山名はどう読むのが正しいのだろうとのお便りをいただいた。藤井兄のご収録によれば、シャカミネ、シャカリョウ、シャカンダワ、と三種に及んでいるのである。私はこの内シャカリョウを呼称していたから、これはこれはと「奥美濃」「秘境奥美濃の山旅」「ぎふ百山」を参考にのぞいたが、シャカリョウだけであった。

徳山村に知人はあるのだが、釈迦嶺登山の（5月24～25日）折は、お邪魔になってはと遠慮して帰っている。釈迦嶺のよみをシャカリョウでよいと信じていたからであろう。ただ山を登るだけに徳山村を通過してきた無造作と不勉強をくやんでいる時、思いがけないご依頼「関西山小屋昭和15年8月号を拝借したい」を、徳山村の大牧富士夫氏からお受けしたのである。

徳山村では、目下、「記録にあらわれた村について」をご刊行のため、その資料をご収集中であって、ご依頼の関西山小屋誌には、岩田不二雄氏の徳山紀行が掲載されている由。大牧氏が、関西山小屋誌をお知りになったのは、故後藤芳雄岳兄の著述（かもしか15号）だが、後藤さんの書庫には、昭和15年8月号が欠本のため、はからずも後藤さんと親交のあった私に、おたづねの声がかかったのであった。

なくなった後藤さんは、私と同齢だが奥美濃精通の大先輩であり、私は後藤さんの業績をしのんで、関西山小屋誌探しにご協力をすることにした。ところが調べてみると肝心の昭和15年8月号は見当らず、早速、蔵書の大家の先輩に事情を訴えて拝借方をおねがいし、ひたすら吉報待ちの身になってしまったのである。

とりあえずお待ちいただいている大牧氏え、これこれのお方にお探しいただいていますから、暫らくのご猶予をお願いいたさねばならない。しかし、これを幸いにさしていただき、恐縮ではあったが、藤井兄からの釈迦嶺のよみ、に加えて山名の由来、つまり釈迦のつく山名は宗教にかかわって命名されていたり、あるいは山容が急峻で顕著な露岩、崩落斜面等に対する山名のようですが、御地の釈迦嶺はこの何れにも属さないのでは、その故事来歴について。

また、かねてから確認のほしかったクロカベの所在点。これは、かって私も△1316.3m（冠山）を、クロカベの称で登頂し、クロカベの山名で紀行文を書きましたが、最近ワンドムツ山を調べたことで、△1316.3mは、高丸が正しい山名であることを教わり、その後の見聞で、クロカベは広野二万五千図にみえる坂内村界北位にあって、東面する露岩帯に付されている名称のように思っていますがと、ご教示を乞うお願いを申し上げたのである。すると待つほどものう九月五日、ご解答をたまわったのである。ここに大牧富士夫氏のご尽力を感謝してご解答を掲載さしていただ

く。釈迦嶺については、四人の方におたずねいたしました。三人の方は地元では、シャカンダワ（ダワ・高所の意）とよんでいるとの答えでした。

A氏、54才。シャカンダワとよんでいた。今は釈迦ミネといっていることもある。なぜ、シャカンダワというか不明。

B氏、60才？　古来シャカンダワという。塚のシンボルのような山で、それは、赤谷にそうてオトハラ、フナキ、チョウシ、ナカツマタと焼畑をつくってきたところで、塚部落の最奥として、親しんできた。なぜシャカンダワというか、不明。

C氏、70才？　シャカンダワ、ダワはダケーともいい、山頂の意味（これは篠山村共通）、昔はナカヤマともいった。山に入って道に迷ったとき、この山にのぼると村にかえれた。シャカンの意味は不明。

D氏、65才？　この人だけがちがう。シャカ、シャカガミネ、シャカミネという。村の人がシャカンダワというのは、シャカミネのある土地を指す。フナキダイラからカラホラとなり（その奥のモチコノホラがあるが、これは入口が急で上方では次のアラクラと一緒になっているという）、このカラホラとアラクラの向いの所を、シャカンダワとよんで、ここにかって焼畑があった。と、（今、直ぐという訳にまいりませんが、地図をつくる予定、できたら差し上げます。）したがって、シャカンダワとシャカミネとはちがうということです。

いづれの人も、シャカの命名については不明。また調べてみます。

クロカベはお説の通り、高丸とはちがい、三周ケ岳につづいた所とのことです。ついに篠山村の方からは、私の口にしてきたシャカリョウが、まったく聞けなかった、ショックである。

ちなみに、嶺を大字典でみると、漢音　レイ。　呉音　リョウ。　名詞　ミネ、ネ、トウゲ、山ノ称、連山、山ノ道、山ノサカ等とあり、嶺は、意味や用途に巾や深さを蔵しているのである。シャカリョウでも間違いではなかったが、篠山村の釈迦嶺の呼称は、大牧富士夫氏にお調べいただいた如く、シャカミネでなければなるまい。

以上で、藤井茂雄兄えの釈迦嶺のお返事はすませたが、まだ、大牧富士夫氏にお約束した関西山小屋誌、昭和15年8月号を、私はおとどけできてないのである。　1983年9月15日

個人山行

白クラ壁

2・5万花背

萌　椰　子

北山に大きな岩壁があるという話、100mは越すとかこさぬとか？　百井町出身の同僚の話によればである。他にもこの話をする人がありでは一見の価値ありや!! と広沢さん、野畑さんと三人で出かけました。烏丸車庫を早朝に野畑さんの車で出発。八瀬大原から小出石へ、峠を越して百井へ、大見、尾越と進んで林道の通行止がしてある所で車を止める。それより仕度を整えて芦火

谷川に沿って３０分程で目的地へ着く。２．５万図によれば、京都と滋賀の県境附近と思うのだが後に百井町出身の方に聞くと、京都府内との事。相当の高さであるが、ブッシュがきつく、草付き苔付等が多く部分的に岩肌を出している感じで、近くに寄れば下部壁は苔一面の上を水が滴り落ちている。よく見ると、その中に錆びたハーケンが一本、こちらに一本、登った人がおられますね!! 野畑さんと顔を見合せて苦笑いしてる間に、広沢さんは岩場附近の偵察をすませて、さて登りましようとザイルをつける。

未回収のピンやボルトが少しは残っているが、それもハングの下迄で、それより上は全然なし。トップを行く広沢さんは相当時間を要す。しかし、私と野畑さんは気楽なもので宙吊りのままで山の話に花が咲く。ビレー地点上部のハングには遠くからでも見える白いテープが残されており、またビレー地点にはボルトの他に珍らしいステンレス製のハーケンが打ちこまれてあった。

小雨が降ったり止んだりの中でハーケンを打つ音が遠くに聞える。相当離れているなと残りのザイルの長さを見る。何か声が聞えるが、川音に邪魔されて判別しにくい。耳をすますと解除の声がかすかに伝わってくる。大声で応答する!! 横でぶらさがってた野畑さん、びっくりして顔を上げる。いつのまにか居眠ってたと言って笑い出す。では後はよろしく願いますと先に出発。ハングで一度キリキリ舞を楽しんで右へトラバース、草付、苔付と浮石で進行が遅い。ピンやシュリンゲ等全部回収して登ってくる野畑さんにチョッと待ってねを連発!!

３ピッチの後でやっと灌木帯へ入りビレー解除、こんな所に石垣がある、この様な人の近ずきにくい場所に何だろうと近ずく。小さいながら右左に台付の狛犬(こまいぬ)を配した木製の祠(ほこら)がある。まずは無事登頂を感謝して合掌、近くのシャクナゲの小枝を折って供え、シュリンゲをシメ縄の代りに木の枝につける。（後日百井町出身の同僚に聞いた話では、昔々、雨乞いの為に行者が祈禱した場所ではないかとの話でした。） 下山には南側の灌木帯を下り、途中よりザイルを使い二回の懸垂で河原に出る。小さい川だけど渡るのにチロリアンブリッジを試みる。軽く昼食をすまし雨もやんでたので対岸の斜面を登り岩壁をゆっくりと眺めてコースを話合って楽しめ、高さは約８０ｍ程であろうと意見のあったところで帰路につく。車に乗ってから雨が強く降り出した中を、鞍馬街道経由で無事に北大路バスターミナルへ、解散した事を報告します。

ロック・トレーニング

裏六甲　　不動岩

８月２１日勤務終了後、午後４時広沢さん宅へ集合即出発で、片岡秀明さんと私の二人がまたお世話になりました。日曜日の名神高速道は渋滞してましたが、車中での話に、先日広沢さんが岳人クラブ夏山合宿で黒部別山の大タテガビンを攀ってきた事を聞き、興味ある話に時間の過ぎるのを忘れて車を走らせました。

中国高速道西宮北インター近くになってから急に雨が降り出し、前方の視界が悪くなる程の豪雨となった中をローギアーでインター出口へ、川の様になった高速道では走れずに止った車が多くあ

りました。国鉄福知山線道場駅に着く頃には雨も止み、駅前の店で生ビールを仕入れて今度は百丈岩カモシカ谷のキャンプ地へ、夏休み中なので広いテント地の彼地此方から子供の賑やかな声がする中で我々は生ビールと焼肉の夜食。夕闇迫りローソクを燈しその明りで食後の将棋を一番楽しむ。

シャツやズボンの上からでも襲撃してくる藪蚊に追われて蚊帳付のテントへ逃げ込んでほっと一息。その後うつらうつらの午後１０時。車２台で近くにキャンプに来た５人か６人の男女のグループの宴会の賑やかなこと、辺り構わずの嬌声まじりで明け方まで騒がれたのには参りました。

２２日朝早く岩壁へ取付く予定が雨模様の空と寝不足の為にゆっくりとして、7時出発で不動岩の下の駐車場へ車を移動する。アプローチを過ぎ岩壁に着く頃には晴れ間も見える空模様になり、元気一ばいで中央稜のハングルートへアタック。

今日は合図に笛を使う練習と、片岡さんのアブミトレーニング、ザイルは新品の９ mm ４５ m ダブルを使用、片岡さんと私の二人、同時ビレーを取ってもらいハング下へ。アブミに乗ってアーだコーだと話をしながらまずは無事に乗越す。午前中に３本を消化して、昼食はハチノスハング下の大テラス。景色を楽しみつつ道場駅前迄行って仕入れた冷たいジュース（片岡さん、有難とう）を喉へ流し込みつつパンを頬張る。

食後は東壁ルンゼルート、フリーで４級プラス３０ m のコース、我々二人はフリーでは無理なので人工で攀るもハチノスハングでは相当の時間を要してキリキリ舞を楽しみ大汗をかいて二人共無事に乗越す。

最後に東稜ダイレクト左コースA1・４０ m をルンゼからスラブへうつり、ボルトのアブミ掛けかえで直上して本日の登攀を終了とする駐車場横の武庫川は濁流で体を洗う気になれず、駅前の水道で顔と手を洗って出発。クーラーをガンガン利かして体の汗をとり、高速道を一路京都へ。ラッシュで渋滞の市内へ入り広沢さん宅で解散した事を報告いたします。

石仏峠

畑　照人

８月１１日（木）　晴

昨年からの念願であった北山、石仏峠のお地蔵さんにお参りする日である。雲ケ畑岩屋橋から相当奥まで車道が完成されたと聞いていたので愛車（二輪）を利用。岩屋橋から祖父谷をつめるが中々立派な道で、バスや大型トラックでも充分通れる道である。小梅谷林道までは舗装されているがそれから向うは地道である。二輪車でも行けぬ所まで入る。浪峠登り口で林業の人に道を聞く。石仏峠なら地図持たんでも行けまっせとのことだ。天気は上々。お山は晴天といったところで全く今日はよろしい。祖父谷峠も何なく来た感じ。急な上りも無いのだ。沢歩きといった感じの場所もあり気持よろしい。水は冷たく透明である。峠の杉の大木、立派な物である。拝みたくなる様な風格

である。祖父谷峠から石仏峠まで３０分の道のりである。（ガイドの時刻表）東へ東へと迷わずに進む。時間通りに到着。目的の石仏様は２００ｍ北へ入るのだ。いよいよ待望の御対面かと思うと心がはずむ。どんなお顔で迎えて呉れるのかなあ…。「オンカカカビサマエイソワカ」地蔵さんの御真言を念じながら道を急ぐ。鶯の声も私の念仏に和するが如く鳴くのである。「ホトトギス」の花の幾種類の顔も私を迎えてくれているようだ。イヤ、山はよろしい。何んで山へ行くのやと質問する人は、一度山へ登ったらよろしい。自分で歩いてみることですね。こちらの説明よりそれが一番ですね。御対面の時は刻一刻近づいてきます。私の念願が今、達成されんとしています。遂にやりました。有難い事です。道に迷わず無事到着。物言わぬ石仏様も何かを語っていられます。「よく来たわ…。ビールで乾杯。もう最高の気分です。実は私一寸不安でした。というのは最近石仏が心無い人によって持ち去られるという、イヤな事件が発生していると聞いていましたので、若しや、こゝの石仏様も…。私の思い過ぎでした。健在です。「心配せんでもよいで」と云われてるみたい。帰りは石仏峠から狼峠への道。昔通った狼峠、今も全然変化なしでした。変っているのは後始末の悪くなったことですね。狼峠下でキャンプした連中の残したゴミの山。全くもう来るなと云いたいですわ。山歩きの嬉しい気分がこれでブチコワシです。公徳心の欠除？　道徳教育の必要を身を以って感じました。我が愛車は無事で私の下山を待っていました。本日の時間表下に記します。

〔コースタイム〕

北大路橋 6:10 ―大岩 6:43 ―岩屋橋 7:30 ―桟敷直登口 8:50 …祖父谷峠 9:15 …石仏 9:48 … 10:00 発…狼峠 10:35 ―愛車置場 11:00 ―岩屋橋発 12:10 ―家 13:00

大　文　字　山

8月18日　曇

送り火後の大文字山へお参りする。当夜は雨だったので、燃え残りのゴマ木が火床に積まれているのは一寸異様な感じがする。三角点への山道は台風の為枝折れの葉が多く積重っていて緑のジュータンみたいだ。雨社の池、蛙君見つからない。今日は下りを藤尾神社へ出るコース、初めてである。やっと１人が通れる細い道で、急な坂道もあり、林は深く谷川の水量も多い。２０分程で車の通れる林道に出たが、こうして歩くと大文字山も裾野？が広い感じで楽しいコースの一つであると思う。藤尾神社は大津市である。社のすぐ目の前は最近開かれた国道のバイパス線で皇子山方面へ行けるとのことであった。

夜　泣　峠

8月22日　晴

大文字山へ行き、台風の爪跡を見て心配になり私のお花畑を偵察に入る。例の如く愛車で峠下まで行くが落石場所もあった。矢張り風雨も予想以上の物であったのかも知れない。道の真中を倒木が筏の様な姿で並んでいるのだ。だんだん心配になってきた。私のお花畑、見るも無残なり。巾5m程で山崩れの土砂や倒木が谷を流れ埋めているのである。アヽ、これでは昔日の面影なし。何日の日にか元の谷の風景に戻れるのか…。

もう一つの奥のお花畑、見るに偲びずこゝから引返すが再度お見舞に参上しようと決心して、心も重く足重く帰宅した次第である。

薬王坂——江文峠

残暑きびしく、降水確率0%となると心は、いや足は自然と山へ向うのである。散髪に行くべく家を出たが、廻れ右。大急ぎで山姿に変身…。京福電車で鞍馬駅へ向う。市原、二の瀬、貴船口と北進するにつれて涼風が車窓から飛び込んでくる。矢張り気温が低いのかな。二輪連結の車内は夏休みの終り近くなり、家族連れの避暑の人々で満席。貴船口で殆んど下車。貴船川の床で涼味をとり一寸一杯というところかね。こちらは、薬王坂から静原→江文峠→大原へ出る心算である。頂上附近に「ね小便地蔵」さんあり。62才男の人が白いヨダレカケを奉納されている。寝たきり老人かな。私は歩ける事有難いですね。静原を見渡せる所にもう一体板碑があり、菩薩像が二たいと経文が彫られてあり、大木が抱く様な形で立っている。昔は通る村人、旅人が拝んだものであろう。江文峠も昔の面影はなく、大原からも静原からも急坂になっていて殺風景である。新道路も工事中だが全然働いている人の姿見えない。だんだん北山も車道の為、自然が失われて行くのが残念である。江文神社から大原へ出て帰る。

愛　宕　山

8月31日

一ケ月おくれの千日詣り？　百日詣り程の御利益あるかもね。梨木谷をつめて首無地蔵さんへ参る。残暑烈しく谷の水を飲むが、冷たく美味である。途中2人の単独行の山屋さんにあう。1人は学生風、もう1人は中年の社会人らしい人である。竜の小屋、現在どうなっているか知りたくてサカサマ峠からすぐ西へ下る道を行く。下草はきれいにかられている。然し5分位で終りで後はひざまで延びている状態。もうすぐ小屋への谷道と思ったら突然目の前に新らしい赤土の林道が見えた。何んだこりゃ、この道は小屋の手前で終りとなっていて、小屋の物干場に毛布が3枚乾してある。飯場みたいな状態、果して老婦1人居るので尋ねると、この附近の山を奈良の人が買っており、私等は山の手入れに頼まれて来ている。12月まで居て来年は5月から再度来るとのこと。お盆休み

で8月休んで昨日来た、掃除しとるとのことだ。話してると仕事人帰って来た。ジュースとお茶をいただく。間違って関係の無い人が車で乗り込んで来るとのこと。私等話中にも自家用車1台紛れ込んで来た。何処かへ抜けられるとでも思ったらしい。「また来てね」の言葉に送られて元の道引返す。ダルマ峠へもこの新道で行けるが面白くないのだ。今までこの谷道はツリフネソウがたくさん咲いていたのであるが…。

サカサマ峠からダルマ峠への途中に荒木氏遭難の碑あり、お参りして愛宕神社へ参拝。気温25°であった。清滝への本道を下り帰る。本社への石段の両側雑草？見苦しいとてきれいに抜いてあるが、赤土が見えて却って逆効果。今迄ならツリフネソウ、アユドコロ、ナルコユリなど咲いていたが惜しいこととして楽しみが一つ失われた。そんなことする閑あるなら道中のゴミでも整理した方がよいと思う。

例会報告

例会No.	目的地	月日	天候	担当者	参加者	備考
1444	夏山トレーニング 伊吹山	変更 8月13日～14日	晴	山元 誠一	岡本 孝 井上 一夫 他3名	久しぶりに夜間登山をしてきた。 別稿報告
1445	廃村八丁周辺	8月13日	晴	鷲見 敏一		都合で秋に延期します。
1446	夏山トレーニング 金毘羅山	8月21日	晴	大槻 雅弘	吉田、大倉 岡田、川原 足立、井戸 方山 ゲスト 佐伯	午前中、重装備で短距離競歩、少々グッタリしたが、午後Yケンにて登攀トレーニングを行なった。
1447	夏山合宿 鹿島槍と五竜岳	8月26日～28日	晴	(先発隊) 大倉寛治郎	山元、岡本孝 井上、井戸 竹田、出海 大槻	(先発隊) 別稿報告
				(後発隊) 岡田 茂久	荒田、和田 方山、三橋	(後発隊) 早朝神域でバス下車、約30分でテレキャビン乗場到着。朝食をすませて8時すぎ地蔵平へ、そして遠見尾根に登り始める。稜線がガスで見え隠れする中を早いピッチで登っていく。これがこたえたのか途

						中からスローペースとなり、五竜山荘着15時20分
1448	ケービング入門 質志の鐘乳洞	9月　4日	晴	鷲見　敏一	大槻F1、古市、和田 広瀬光、大木 岡田、方山 鷲見夫人 ゲスト参加 藤井	暑い夏でも涼しくて寒いぐらいというアナグラ天国に、今年ももぐってきました。 別稿報告

雑　　報

9月集会報告

9日　下鴨寮

出席者　本局　和田、方山、井戸、鷲見、渡辺朋、原田、大槻、三橋　市役所　荒田
O警　津田　高速　岡田　梅津　吉田　九条　古市
洛西　広瀬　烏丸　大倉　以上　15名

今月は幕営生活として、ランプやコンロの取り扱い方法を実際に手にとって行なうという有意義な講習を行なった。ふだん、誰かにまかせておけばよいと人まかせになりがちな事が多いが、実際に自分でやってみるという事はよい勉強になった。来月も引続きテント等について生活技術を学習したいと思います。例会報告では夏山合宿が天候にもめぐまれてよかったこと。しかしスタミナ不足があったので、事前にトレーニングを怠たらないようにしたいとの反省もあった。

〔住所変更〕

錦林　生田敏雄　大津市穴太2丁目22－21　TEL　0775－79－0543

大倉寛治郎君が、骨折事故のため　9月12日相馬病院に入院しました。1日も早く回復し、元気な顔を見せてくれるよう祈ります。

岳連だより

◎　冬山セミナー　11月25日　於、伝統産業会館　19時より。

◎　昭和58年度公認指導員検定会（岩登り技術）

日付　11月19～20日（小雨決行）　19日　18：30静原キャンプ場集合

◎　昭和58年度　スキーバスツアー

日付　昭和59年1月20～24日　於、野沢温泉スキー場

帆布・流布
テント・シート
雨合羽

木村工業有限会社

京都市中京区ミブ車庫前
TEL 801-5331(代)

名古屋営業所
名古屋市西区児玉町7－30
TEL 521-7541代～4

テニス用品
スキー用品
山用品

交通局の皆さん
とりあえず　京菱へ
満足のいくようにします

京菱運動具店
下・大宮松原上ル
TEL 801-1331

一年中、山用品だけの
プロショップ

おかげさまで創業1周年を迎え、
店も大きく、商品も充実させて
頂きました。もちろん開店以来の
全品徹底バーゲン価格も続行中！

LOG CABIN
ログケビン
京都市中京区御幸町通錦蛸薬師南入
☎(075)221－7569　〒604
(寺町の一つ西の通りの錦上ル東側
四条河原町(阪急河原町)より徒歩3分)

真の専門店として
好日山荘は前進しております
山とスキー用具の
ことなら御まかせ下さい
確信ある用具を
確信ある価格で・・・・
好日山荘
河原町六角下ル東入
TEL 241－1731

山の本

山岳書 電話ノ本にて
無料配送

ゆかり書房
075(801)8333

昭和58年10月1日

京都市中京区千生坊城町48

京都市交通局内
京交山岳部

お知らせ

今度、当チロル店舗は近代ビル改築計画に伴い、一時立退きと相成りました。
改築期間中（約1年）は、本店2階にチロルコーナーとして継続営業いたします。

チロル

移転先　本店2階
京都市中京区西ノ京円町24
ダイヤ運動用品株式会社

まかせて下さい…ネ
山と乃井一
のことなら…

☆在庫豊富にとり揃えています
☆山の道具は　ぜヒ　御相談下さい

山とスキー専門店
ビッグ ホリイケ

河原町店　上・河原町通 丸太町東入
TEL 222－0363

御婚礼
御引越
ぎおん菊水 専門

ぎおん菊水運送株式会社

[illegible]センター
京都市山科区西野山階町12－12
TEL (075)581－3101
本　社
東山区大和大路通四条下ル　541－2345
鴨川営業所
中京区室町二条上ル　256－3059

結婚引出物・内祝・開店記念品・粗品
仏事用お返し品・お中元・お歳暮用品

贈答品総合センター
厚生会指定
サンコー クラフト
西島輝雄

左．川端通丸太町下る下堤町88
TEL (075)771－3442

山とスキーの店
京都 あるむ

京都市中京区新町三条上ル
075－255－0288

HIKE & CAMP

この用具の事ならコニシが一番です！
御来店ありがとうございます

山とスキー レジャー スポーツ ショップ
そして
海の

中・二条通河原町西　TEL 231－1202